

	ドイツ全体の動き	ゴスラーとランメルスベルク鉱山
962	オットー1世、皇帝戴冠	本格的な採鉱が始まり、集落から都市へと成長
	中世のドイツには首都はなく、国王・皇帝は各地を巡回して議会を開いた	ハインリヒ2世の時代、ゴスラー王宮の建設に着手
1039-56		ハインリヒ3世、王宮を完成させる
1051		修道院教会 (St.Simon & Juda) 献堂式
11世紀半ば	ハインリヒ4世の時代 (司教叙任権をめぐる法王と対決「カノッサの屈辱」)	ハインリヒ4世がゴスラー王宮で誕生。 王領地管理のための帝国代官を初めてゴスラーに設置
11～12世紀	十字軍、ドイツ人の東方植民	金属の取引、貨幣の製造。都市としても繁栄し、人口は5000人、市壁を整備した。マルクト教会の創建
1152	ザクセン大公ハインリヒ獅子公と皇帝フリードリヒ1世 (バルバロッサ) の協力 (前半) と、対立 (後半)。最終的には獅子公は追放。	ゴスラーの代官職を獅子公に授与。(獅子公の領域政策上、要の位置にあるのが帝国領ゴスラー。何としても手に入れたかったが領有権は得られず)
1166～1180		ハインリヒ獅子公とザクセン諸侯の騒乱に巻き込まれ、ゴスラーが占領されたこともあった。 獅子公は、籠城して戦う相手に、ランメルスベルクの鉱夫を動員して水路を断ったこともあった。
1219		ゴスラーで開催された最後の帝国議会。都市としての特権が付与された。(フリードリヒ2世の時代)
13世紀		鉱山関係者の力が減じ、高級織物交易商が市政でも発言力を強めた。ビールの醸造と輸出も経済を支えた
1254		大聖十字施療院の建設
1267		ハンザ同盟に加入 (~1566)
1300頃		帝国自由都市となる
1323		スレートの採掘、販売が始まる
14世紀	ペストの大流行	市内の各世帯に、木樋による水の供給が始まる
1460頃～		新技術の開発で採掘が再開し活況。市庁舎やギルドハウス (Kaiserworth 1495など) の建設、市壁の完成、教会をゴシック様式に改築
16世紀	宗教改革の時代	ゴスラー市は改革派となる
	領邦国家の強大化と海上交易の隆盛が特徴の時代	市は、公国との条約で鉱山地区と森林についての権利を失う。内陸ハンザ都市のゴスラーは衰退期に入る
1632	三十年戦争 (1618-48)	スウェーデン軍に占領される → 町の衰退に拍車
1693		ジューメンスハウスの建築
1802	対ナポレオン戦争の時代	プロイセン王国領となり、帝国都市の歴史に幕
1871	プロイセン王国主導でドイツ帝国が成立	王宮を再建 (1875)
1988		採鉱が終わる